の用に入る、因て此名あり、いかやうの色に染まるにや聞ん事を冀ふ、如此問ありて答なければ、本邦の山礬の香の有無は詳ならざれども、上にいふ肥後の人朝鮮人の此方のそゑめばを見て、これにて染ぬれば、鮮黄なりとて、その教によりて、今に果子を製して、名産となりぬれば、花の香の有無は、春蘭も西土にては、香の馥郁たるものなれども、本邦の産は香のをとれるがごとくなるべし、山礬は的當の物なるべし、岩崎常正が所寫の山礬を見るに、其葉巵子葉に似て鋸齒あり、時珍の説に、其葉似巵子葉生不對節、光澤堅强略有齒といふに附合せり、その花は二寸許の穗葉頂に五六條出て、五瓣の小白花を開く、形梅花のごとくにて三分許、一條十五六輪あり、然れども集解に穗をなすとは見へざれども、繁白如雪といひ、又花鏡にも著白花細小繁といへば、數條をなさねば繁とはいはれまじ、又花を開くを本草綱目秘傳花鏡ともに三月開花といへり、花信風には、大寒三候に配せり、また群芳譜の花月令、十二月梅蕊吐山茶麗、水仙凌波茗有花、瑞香郁烈山礬鬯發といへるは、小寒一候梅花、二候山茶、三候水仙、大寒一候瑞香、二候蘭花、三候山礬といふにはかなへり、

〔重修本草綱目啓蒙二十五〕山礬　トチシバ筑前　ソメシバ　ヲコシゴメシバ　ハイノキ共上同　ヤマキ豐前　シマクロギ日州　クロバイ紀州　アクシバ　ハナモチ城州　ハナシキミ同上修學院村

一名海桐花群芳譜　小白花同上　梅弟名物法言　米囊事物紺珠　九里香物理小識　幽客典籍便覽

山中ニ生ズ、高サ一二丈、枝條婆娑タリ、葉冬ヲ經テ凋マズ、形枇葉ニ似テ濶ク、深緑色ニシテ光リアリ、互生ス、春葉間ニ花ヲ開キ、穗ヲナスコト二寸許、イヌザクラノ花ノ如シ、五瓣白色黄蘂香氣アリ、大サ三分許、

集解、芸香ハクサノカウ、和名抄　ヘンルウダ

蠻種ナリ、花戸ニ多シ、扦插シテヨク活ス、葉ハマツカゼグサノ葉ニ似テ、小ク厚ク白色ヲ帶ブ、臭